椙山女学園大学教育学部紀要（*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*）**14**：81−109（2021）

原著（*Article*）

幼児期の音楽表現カリキュラムの研究　その２

――園内研修による事例検討とカリキュラム改訂――

Study of curriculum development of music expression in early childhood (2): Case study and curriculum revision

山中 文*・小林 奈美*・三田 郁穂*・今井 直子*・佐藤 百合子*・太田 央子**
YAMANAKA, Aya* KOBAYASHI, Nami* MITA, Ikuho* IMAI, Naoko* SATO, Yuriko* OTA, Hisako**

摘　　要

「幼児期の音楽表現カリキュラムの研究 その１」[1)]において開発した音楽表現カリキュラム試案を実践し，その事例研究からカリキュラム試案の成果と課題を明らかにし，カリキュラムの再構築を行った。

キーワード：幼児期の音楽表現，カリキュラム，共通事項，幼稚園

Key words：music expression in early childhood, curriculum, kindergarten

はじめに

本研究では，その１（「幼児期の音楽表現カリキュラムの研究 その１」[1)]）で，小中学校の学習指導要領音楽科に示されている〔共通事項〕との関連を軸にした幼児期の音楽表現カリキュラム試案（表１参照）を開発した。また，同時に，椙山女学園大学附属幼稚園（以下，椙山幼稚園と略）の音楽表現に関する年間指導計画の課題をあげ，カリキュラム試案をもとに，さらに子どもの育ちがよくわかる年間指導計画を再構築する必要性を示した。

それを受け，椙山幼稚園では2019年の園内研修のテーマを「音楽表現活動の見直し」とし，１年間の検討を行った。椙山幼稚園には，もともと，子どもの意欲や関心，活動状況から吟味され，取捨選択された教材をもとに長年保育を行ってきた実績がある。園内研修では，それらを踏まえながら，カリキュラム試案をもとに子どもの音楽表現活動事例を検討した。本稿では，そのような事例研究からカリキュラム試案の成果と課題をあげ，再構築したカリキュラムを提案する。

１．幼児期の音楽表現カリキュラム試案と事例研究の過程

2018年に開発したカリキュラム試案（表１）は，「資質・能力の基礎」として，小学校の〔共通事項〕との関連から幼児期にはどのような素材や表現の仕方に気づいて

* 椙山女学園大学附属幼稚園
** 名古屋医療秘書福祉専門学校

表１　音楽表現カリキュラム試案

	小分類	年少	年中	年長
大分類1 素材や表現の仕方	音	1　身のまわりの音に気づく。 2　音色，声色の違いに気づく。 3　音の強弱を身体運動でとらえる。 4　音を色や形でとらえる（＝リズム，メロディー）。	5　身のまわりの音を聴きわける。 6　長い音，短い音に気づく。 7　音色を聴きわける。 8　楽器の鳴らし方を工夫する。 9　音の強弱をつくる。 10　音を色や形で表す（＝リズム，メロディー）。	11　音の立ち上がり，減衰に気づく。 12　イメージにあった音色，声色，強弱を選ぶ。 13　音の強弱の効果を知る。 14　複数の音をグループで色や形に表し，再現する（＝リズム，メロディー）。
	リズム	15　拍に合わせて歩く，手をたたく，動く。 16　拍に合わせて，簡単なリズムを打つ。 17　拍の長さを体感し，身体運動を通して速度やイメージの違いを表す。 18　サイレントシンギングをする（＝音，メロディー）。	19　拍に合わせて簡単なリズムを表す。 20　簡単なリズムの応答をする。 21　イメージと速度について気づく。 22　サイレントシンギングをする（＝音，メロディー）。	23　拍に合わせて簡単なリズムを作って表す。 24　簡単なリズムの応答をする。 25　楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを考える。
	メロディー	26　身体運動や声を通して音の高低に気づく。 27　音の上行，下降，跳躍等に気づく。 28　言葉を旋律的に表す。 29　応答的な旋律を歌う。	30　身体運動や声を通して音の高低を表す。 31　音の上行，下行，跳躍等を身体運動や声で表す。 32　同じメロディー，違うメロディーに気づく 33　旋律的な言葉の応答をする。 34　応答的な旋律を歌う。	35　楽曲のフレーズと息継ぎに気づく。 36　応答的な旋律を歌う。 37　三部形式を身体運動で表す。 38　合いの手のような旋律に気づく。 39　階名模唱で音高をとらえる。
	ハーモニー	―	―	40　単旋律と複旋律の違いに気づく。
	テクスチャー	41　オスティナート系の手遊びをする。 42　簡単な直行カノンの曲を歌う。	43　オスティナート系の手遊びをする。 44　カノンを視覚的に理解する。	45　伴奏の効果を知る。
	調性	―	46　調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ。	47　長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ。
大分類2 音楽の機能		48　音楽やリズムによって，身体の運動が誘発されたり，感覚が刺激されたりする。 49　音楽やリズムに共鳴し，情動が誘発される。 50　音楽やリズムにより音楽的時間を共有する一体感を持つ。 51　手遊び等により，数概念の形成，言葉の認識の深化，季節や行事の訪れの理解等が促進される。 52　音楽やリズムがこどもたちの遊びとして存在する。		
大分類3 音楽の表現対象		53　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴とともに楽しむ。 54　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴とともに楽しむ。	55　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴を生かして歌う。 56　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴を生かして歌う。	57　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴を生かして歌う。 58　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴を生かして歌う。 59　登場人物の感情に合わせて，表現する。

いくのかということに視点を当てている。そのことから，大分類１「素材や表現の仕方」では気づいていく内容を段階的に示すなどして，中心的に作成しているが，それは「素材や表現の仕方」の獲得のみに視野を当てて音楽的技能の訓練を行ったり知識を注入したりするのではなく，大分類２「音楽の機能」にあるような音楽を通して行われる様々な分野への視野や，大分類３「音楽の表現対象」にあげた内容との関連の中で行うことを意図している。表現する対象があり，音楽が機能する面がある中で，音楽的に何を面白がっているのか，今何を獲得しようとしている段階なのかを確認しつつ指導を計画するというのが，このカリキュラム試案のねらいである。そのことが，ふりかえれば「音楽の機能」や「音楽の表現対象」に関わる活動の充実となっていくと想定している。

椙山幼稚園では，先述したように2019年の園内研修で「音楽表現活動の見直し」を行い，カリキュラム試案をもとに子どもたちの音楽表現活動事例を検討した。まず１学期にカリキュラム試案の共通理解をはかり，２学期から表１の通し番号による項目をもとに各学年で事例を収集し，12月に中間発表を行い，カリキュラム試案の内容から事例を検討した。そして，2020年２月の2019年度最終園内研修において，事例検討とカリキュラム試案修正に関する提案を含めた考察を最終レポートとして学年で発表し，全員で検討した。

次章からは，学年ごとに，まずその最終レポートを掲載し，全員での検討を元にしてその課題を整理する。各学年の最終レポートは，ポイントを落として整理し，資料１～３で示した。レポート中の事例は各学年の項目に沿って集められているが，前後の学年の項目に該当する事例についても記載があるため，資料１～３では，該当する学年より低学年の項目は破線（……）で，高学年の項目は二重線（＝＝＝）で示した。出てきた事例には，子どもの生活の中で見られた事例と，教師がカリキュラム試案をもとに意図的に行った活動の事例がある。また，実際の最終レポートにもっと多くの事例があがっていたが，本稿では字数の関係で１，２例に省略し，文言や体裁は文意を変えない程度に各学年で揃えるように修正した。各学年の考察については，カリキュラムに関する疑問や課題が述べられている部分については網掛け（　　）で，カリキュラムに対する提案部分は波線（～～～）で示した。

２．年少担任・副担任による事例と学年の考察

資料１

2019年度　年少組　園内研修　最終レポート

大分類：素材や表現の仕方

小分類：音

１ 身のまわりの音に気づく

〇事例1–1　「先生，雨の音がする」「風の音がする」という声に「聞いてみようか？」と誘うと，

どの子も静かに耳を傾ける。扉の隙間から入る風の音に，「おばけがいるよ！」「風がとんとんしてるよ」など口にする子もいた。

2 音色，声色の違いに気づく

○事例2–1　教師が牛乳パックの中にそれぞれ，水，どんぐり 3 つ，ペットボトルのキャップ 1 つを入れて振り，子どもたちが音で中のものを当てられるかクイズをした。水の牛乳パックを振ると「水の音」と答えたが，どんぐりとキャップのものを振ると，「同じ」や「似てる」と言い，両方ともどんぐりが中に入っていると答えた。

3 音の強弱を身体運動でとらえる

○事例3–1　「大きくトン　小さくトン」のリズムで，歌詞が「大きく○○　小さく○○　～」と繰り返されるのに合わせて大きな声で大きな振りで踊ったり，小さな声で小さな動きで踊ったりが自然にできるようになった。

4 音を色や形でとらえる　事例なし

年中 5　身のまわりの音を聴き分ける

○事例5–1　「耳を澄ませて音を探すお散歩に行くよ」と声を掛けて屋上に出た。「チーッチッチ」と鳥の声に「あ，カラスだ」「違うよ」「カラスはカーッだよ」と口ぐちに話す。屋上では車が通り過ぎる音に「ブォーンって音がする」，園外の歩道の話し声に「誰かがおしゃべりしてる」と聞き耳を立てるが，大人数（18名）で，集中力が保てず，一瞬音に集中してもすぐにおしゃべりが始まり，難しさを感じた。1 ヶ月後にも試したが同じ結果であった。

年中 6　長い音，短い音に気づく

○事例6–1　教師のリズムを真似させた。「たんたんたん」「たんたたたん」「たーんたん」「たたたんたたたん」などのリズムを手拍子で楽しんだ。リズムの変化を見逃さないように，教師をしっかり見て，真似して返そうとしていた。カスタネットをだして，「りんご（たんたんたん）」「さくらんぼ（たたたたたん）」「チョコレート（たたたんたん）」と言葉に合わせてリズム打ちをすると，「次はアイスクリームにして！」などと言って楽しんだ。

年中 7　音色を聴き分ける

○事例7–1　「フルーツバスケット」を全員が理解して楽しめるようになったところで楽器を使った。ブドウを「鈴」，イチゴを「マラカス」，ミカンを「ギロ」[2)]，メロンを「タンブリン」，フルーツバスケットを「太鼓」で行った。楽器は隠して，教師が鳴らした音が聞こえたら，椅子を移動するようにした。しきりに音の出どころ（楽器）を気にしたが，「見ないで音を聴いてね」と声を掛け，ゲームを進めた。鈴とマラカスの音に解りづらそうな顔をしたり，どの楽器の音でもフラフラ立って移動したりする子もいたが，概ね耳を澄ませ，合わせて移動した。「太鼓」の音は，全員が立ち上がって移動できた。ゲーム終了後に種明かしで楽器 5 種類を見せ，楽器に触れる機会をつくった。特にギロが人気で，なかなか次に譲らず独り占めしていた子が多かった。

年長 12　イメージにあった音色，声色，強弱を選ぶ

○事例12–1　楽器に触れる機会を作ると，A が曲が変わる毎に楽器を替え，鳴らし方も工夫した。「アンパンマンたいそう」→鉄琴，「パプリカ」→ギロ，「たまごはエッグ」→マラカス，「やんちゃ怪獣どっかーん」→鈴，「たけのこ体操」→マラカス。

小分類：リズム

15　拍に合わせて歩く，手をたたく，動く　事例なし

16　拍に合わせて簡単なリズムを打つ

○事例16–1　「音楽隊がやってくる」に合わせてリズム打ちを行った。「○○（楽器）でチャチャチャ

♪」と歌ってから，「♪♪♪」の拍を打つ。9割以上の子は，拍を合わせることができた。ふざけて歌の最中にずっとうち続ける子もいた。①手で拍打ち②カスタネットを使って拍打ち③カスタネットと太鼓で拍打ち，という順番で行った。

17　拍の長さを体感し，身体運動を通して速度やイメージの違いを表す

○事例17−1　「いきいきDAY」（発表会）で踊る「ドコノコノキノコ」が大好きな子どもたち。遊びの時間でも，流してと言うのでよくかけていた。曲の最後は速くなる。子どもたちは曲がだんだんと速くなっていく度に，いつも声をあげながら，曲の速さに合わせて体を動かして楽しんだ。

18　サイレントシンギングをする（＝音，メロディー）

○事例18−1　「大きな栗の木の下で」の手遊びで「くり」の部分を歌わずに動作だけにした。始めは，ふざけて歌を歌う子もいたが，何度も繰り返して遊ぶうちに，心の中で歌う楽しさを感じることができるようになってきた。

小分類：メロディー

26　身体運動や声を通して音の高低に気づく

○事例26−1　「かえるの合唱」を歌った時にかえるになりきってジャンプすることを喜んだので，ピアノの音やクラッシックの曲に合わせて様々な動物になりきる活動を取り入れた。子どもたちは，高い音や曲だとちょうや鳥など柔らかな表現をし，低いとぞうやライオンなど，重々しい動きをしていた。

27　音の上行，下降，跳躍等に気づく　事例なし

28　言葉を旋律的に表す

○事例28−1　お話ごっこで様々な動物になる時，その動物らしいクラッシックの曲（『動物の謝肉祭』など）を流すとぐっと楽しくなり，表情や動きが変わった。セリフをその動物の曲のメロディーに似た言い回しをする子もいた。

29　応答的な旋律を歌う　事例なし

小分類：テクスチャー

41　オスティナート系の手遊びをする　事例なし

42　簡単な直行カノンの曲を歌う　事例なし

小分類：調性

46　長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ

○事例46−1　「だしてひっこめて」を高音や低音，短調で弾いてみた。子どもたちは高音では「妖精の音だ」と言って振付を小さく，低音は「ぞうさん」と言って大きくした。短調は「ハロウィンだ」と言い，怪しい声で行った。

大分類：音楽の機能

48　音楽やリズムによって身体の運動が誘発されたり，感覚が刺激されたりする

○事例48−1　曲に合わせて踊ることが盛り上がった頃，「エビカニクス」で踊った後，運動会のBGM「エビカニクス〜ハイパーバージョン」がかかると，子ども達は「なんか，走りたくなっちゃう気分！」と言い，走り出した。

49　音楽やリズムに共鳴し，情動が誘発される

○事例49−1　共有廊下に楽器をいくつか置いて，自由に使えるようにした。Sは民族楽器のマラカスを2つ持って鏡の前で何かになりきっているかのような表情でずっと踊り続けた。その後，デッキから音楽が流れてくると，「たんたんたんたん」のリズムに合わせてタンブリンをたたいた。他の曲になると，楽器を替えて鳴らし，どんどん踊り続けていた。およそ20分夢中になって楽器遊びと自由な踊りを楽しんだ。

50　音楽やリズムにより音楽的時間を共有する一体感を持つ

○事例50–1　共有廊下にソプラノシロフォン，アルトシロフォン，テナーアルトシロフォンの 3 台を出しておいた。それぞれを三角の形において，真ん中 2 人の子どもが入って叩いていた。 1 人が木琴を打つと，もう一人の子が真似して打つことを繰り返して遊んでいくうちに， 3 つの木琴を追いかけっこのようにぐるぐる回って打った。

51　手遊び等により，数概念の形成，言葉の認識の深化，季節や行事の訪れの理解等が促進される

普段の歌やリズムが該当

52　音楽やリズムがこどもたちの遊びとして存在する

○事例52–1　子どもたちが以前作った手作り楽器を久しぶりに取り出し，「音楽隊がやってくる」に合わせて演奏した。自作の楽器で打ちたいと言いだし，歌詞の「カスタネットをチョンチョンチョン」の部分を「マラカスをシャンシャンシャン」と歌ったり， 1 番と 2 番で違う楽器を使ったり，新しい楽器も作ったりして楽しんでいた。

大分類：音楽の表現対象

53　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴とともに楽しむ

普段の歌やリズムが該当

54　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴とともに楽しむ

○事例54–1　豆まきの歌や「やまごやいっけん」の手遊びでは，鬼から逃げるように振り付けをしたり猟師から逃げるウサギの様子を体で表現したりするなどして歌うのを楽しんでいた。

◎学年の総合的考察

「小分類：音」については，子どもたちは生活の中でこどもたちなりに気づいている。「小分類：メロディー」については，概念が難しい。言葉を旋律的にあらわす，応答的な旋律とは？「小分類：テクスチャー」は，今後どう発展していくのか。オスティナート系の手遊び，直行カノンの曲で，年少向きの曲を知りたい。

項目 4 は，年少組には難しいのではないか。項目15と16の違いは何か。項目18では，「チョンチョンチョン（歌）」の後の「♪♪♪」は拍打ちはサイレントシンギングに該当するのか。項目27の音の上行や下降，跳躍等については，子どもがそれを言葉にする場面が無いので，何をもって“気づく”とするのか説明しづらい。「あたま，かた，ひざ，ポン」の手遊びは，これに該当するのか？　項目51は広範囲にわたるので，①数②言葉③季節に分けても良いのでは。　項目53には歌以外のリズムは含まれないのか。項目54は，「ストーリー性」をどこまでととらえるのか。いろいろな歌やリズムにはほとんどストーリー性があるように思う。替え歌はどの項目に入るのか。また，「大工のキツツキさん」のようにだんだん動作が増えていく遊びはどの項目に入るのか。

「大分類：音楽の機能」にあるような，友達と一緒に音楽やリズムを共有する楽しさは，一番大切にしていきたいと部分だと思っている。48，49，52は，事例以外でも色々な場面で見られる。

資料 1 に示したように，年少で事例があがらなかった項目は，項目 4 「 音を色や形でとらえる」15「拍に合わせて歩く，手をたたく，動く」27「音の上行，下降，跳躍等に気づく」29「応答的な旋律を歌う」41「オスティナート系の手遊びをする」42「簡単な直行カノンの曲を歌う」の 6 項目である。事例があがらなかった項目数は，3 学年中最も多い。

しかし，項目15や27については，実際は行っている。事例26–1や28–1で「動物の謝肉祭」等を用いて動物になりきったことが記録されているが，その際，犬やかめ，

ライオンなどになって，子どもたちは，それらを表す音楽に合わせて歩いて（這って）いた。さらに，たとえば『動物の謝肉祭』の「ライオンの行進」部分に合わせて這っていた際には，ライオンの咆哮を表す音の上下に反応して，手や首を上下させていた。

これらから，教師は実践においては経験的に「音」「リズム」「メロディー」等の音楽的要素を使った遊びは行っているものの，項目にあげた各段階のねらいや子どもの読み取りとの関連についてはまだ教師間に共有理解されていないことがわかる。

各段階のねらいと子どもの読み取りのくいちがいは，年中の項目6「長い音，短い音に気づく」の事例でも明らかである。この項目6は小分類「音」の項目であり，項目の趣旨は，1音で長く鳴る音や短く鳴る音があることに気づくことであったが，事例では長短のリズムに関するものになっている。

学年の総合的考察においても同様の傾向がみられる。総合的考察では，カリキュラムの疑問や課題となっている網掛け（　　）部分が多く，たとえば項目28や29の「言葉を旋律的に表す」「応答的な旋律」がわからなかったと記述されている。しかし，実際の保育中には，給食時に子どもたちが♪〇〇せんせい，ここいいよ♪と抑揚やリズムをつけて教師を食事の席に呼んだり，「入れて」「どうぞ」を抑揚やリズムをつけて応答したり，「お風呂」の手遊びのように，♪熱いかな♪♪熱いかな♪というように応答的に返すような手遊びが見られたりした。また，サイレントシンギングについては，項目18の事例には適切なものが記載されているのに，考察では応答的なリズムを打つことをサイレントシンギングと混同している様子がうかがえる。さらに，項目27の上行下降の旋律について，旋律の上行下降とは無関係な動作がなされる「あたまかたひざポン」が該当するかとも記されている。

このように，「音楽の要素」から項目を立てている分類「素材や表現の仕方」では，多くの誤解があったり，事例と結びつけられていなかったり，事例として取り上げられなかったりする様子が見られた。

それに対し，「音楽の機能」には「友達と一緒に音楽やリズムを共有する楽しさ」は，一番大切にしていきたい部分だと思っている」とあり，重視されていることがわかる。

本カリキュラム試案は「音楽の機能」に重点が置かれている音楽表現指導の現状に一歩踏み込んで，子どもたちが何の音楽的な面白さを感じ取っているかに視点を当てることによって，それらを発展させていこうとするものであった。たとえば，保育現場で牛乳パックや乳飲料パックにビーズ等を入れて手作りマラカスを作り，曲に合わせて楽しそうに子どもたちが振って音を鳴らす，といった光景はよく見かける。「音楽の機能」の分類の項目49や50に関わる活動であると考えられる。しかし，これで終わっては，遊びの発展性はない。子どもたちは，まず「ふると音がなる」ということを楽しむ。では，その「音」とは何かと素材に注目したいのである。音には「強弱」「音高」「長さ」「音色」という属性がある。それら一つ一つは子どもたちが探究

し得るものであり，そこから様々な遊びや活動が生まれてくる。そのような意図でカリキュラムの「素材や表現の仕方」の項目は作成されていた。そのような意図はまだ保育現場では違和感があるともうかがえる。

しかし，事例では，手作りマラカスの音当てクイズをしたり，「フルーツバスケット」の楽器版を考案したり，動物になりきる活動を行ったり，事例にはないが，音に着目して紙で太鼓を手づくりしたりと，カリキュラムの項目に該当した活動は多く見られた。替え歌や動作が増えていく遊び歌はどの項目に入るのかと，歌を検討していった様子も考察に記されている（替え歌は項目52に，動作が増える遊び歌は項目17に該当する）。そのような活動や検討から，年少では，本カリキュラム試案による実践研究により，「友達と一緒に音楽やリズムを共有する楽しさ」を重要視しながらも，さらに音楽の要素からとらえる視点をもとうとしていると見ることはできよう。これまでの経験も大きいが，さらに，それらへの意識化をはかれたという点でカリキュラム試案による実践研究に一定の成果が見られたともいうことができる。

３．年中担任・副担任による事例と学年の考察

資料２

年中　園内研修　最終レポート

大分類：素材や表現の仕方

小分類：音

年少１　身のまわりの音に気づく

○事例1–1　ムシの鳴き声が聞こえることに気付いて探しに行き，「虫の声」の歌の鳴き声との違いを見つけたりする。

○事例1–2　イチョウを集めて輪ゴムでしばり，花束に見立てて遊んでいて，花束を振って「海の音がする」と喜んだ。

年少２　音色，声色の違いに気づく

○事例2–1　ハマグリの貝をたたいて出た音とカスタネットの音が似ていることに気付く。ハマグリの貝の音のほうが澄んだ音が出るので，「いきいきDAY」（発表会）で使いたいという子がいた。

５　身のまわりの音を聴きわける

○事例5–1　ムシの鳴き声を聞いてムシを図鑑で探そうとするが，「チンチロリン」等擬音で書かれているだけなのでタブレットで確認し，「ツヅラサレコウロギ」であることに気付く。

６　長い音，短い音に気づく

○事例6–1　リズム遊び　９月からＣとＧの繰り返しを四分音符だと「おとうさん」，２分音符だと「おじいさん」，８分音符だと「赤ちゃん」とし，ピアノで弾いて聞き分けて動く遊びをしている。

７　音色を聴きわける

○事例7–1　缶で作成したマラカスに中身（ビーズ，どんぐり，アイロンビーズ，）の絵を貼り，置いた。一つは「？」と書いた。遊び中に音を選びながら鳴らしており，音当てクイズをすると，ほぼ音の違いを当てることができた。

8　楽器の鳴らし方を工夫する

○事例8–1　「にんげんっていいな」でタンブリンをたたいて踊り始めた子に合わせて数人が一緒に振り付けを考え，回ったり体を揺らしたりしながらたたいた。これまでのリズムに合わせたたたき方ではなく，新しい遊び方だった。

○事例8–2　オバケ屋敷ごっこではだれかが必ずタンブリンを出して鳴らす。この時の鳴らし方は，音楽に合わせるときとはまるで違い，不規則で迫力を出すような鳴らし方をする。

9　音の強弱をつくる

○事例9–1　手遊び「こぶたさんのおうち」「おにのパンツ」など歌詞中に大小があるものを声の大きさや手の表現に強弱をつけて表現する姿があった。

10　音を色や形で表す（＝リズム，メロディー）

○事例10–1　作ったマラカスを優しい音と大きな音でわけるため目印を書くことに。教師が「誰が見てもわかるように絵や色で描いたら？」というと「大きい音は大きな紙，（優しい音を小さな音と間違え）小さな音は小さな紙でかく」と言い，大きな紙にクレヨン（黒）で大きくぐるぐると円を描いたり，青色絵具で紙が破れるくらいに力を込めて描いたりした。優しい音はと聞くと，小さな紙に小さな丸をたくさん書いた。

年長12　イメージにあった音色，声色，強弱を選ぶ

○事例12–1　クリスマスの曲を流し，演奏を楽しんでいる。曲中に鈴が流れるのを聴き分け，子ども達も鈴を持ち，鳴らしながら踊り始めた。以来，クリスマスの曲は鈴しか使わなかった。

●学年の考察

年少の項目1に該当する経験を活かし広げたことが，項目5の事例につながったと考えられる。これらの項目はほかの分野と横断的につながる学びにもなっていることがわかる。

項目6では，音の長短だけでなく，高低も関係しているのか知りたい。項目7は，事例から十分にできていると考えられる。聴き分けて，より適した音を子どもが選ぶ姿も見られた。項目8については，日頃の保育や「いきいきDAY」（発表会）で演奏する中で工夫する姿もあった。遊びの中でも子どもが進んで楽器を使用しており，心地よい音を考えている様子がある。項目9は，年少の項目3「音の強弱を身体運動でとらえる」ことはできているが，子どもだけでは強弱をつくることは難しく，教師が意識してかかわっている。項目10は，年少時に経験をしておらず，教師がカリキュラムを意識して導いた。この項目については，表現の制作とも関連するので，取り扱いを検討したい。

項目5と7の「聴き分ける」経験から，子どもたちの中にイメージにあった音色，声色，強弱を選ぶということが芽生え始めていることが窺える。

小分類：リズム

19　拍に合わせて簡単なリズムを表す

○事例19–1　「ながぐつマーチ」の曲で，「どんどん」の部分で足踏みをする姿が見られた。

年長23　拍に合わせて簡単なリズムを作って表す

○事例23–1　「だしてひっこめて」でリズムを作る役を毎日交代で希望者がやり，みんなで真似をする。

20　簡単なリズムの応答をする

○事例20–1　「もういいかい」と手拍子をして言うと同じ手拍子で「もういいよ」と返す。リズムを変えるとその通りに真似する。「もういいかいかい」「もういいよよ」など変化させると喜んだ。

○事例20–2　教師と子どもの「○○ちゃん」「はあい」と応答が上手になったので，子ども同士で応答をつないだところ，拍は途切れるが応答はできた。手拍子で呼び，足踏みで応える子も。

21　イメージと速度について気づく

○事例21–1　「子犬のマーチ」の曲に合わせて，おじいさん（おばあさん）・子ども・赤ちゃん・ヘビで歩き分けた。おじいさん（おばあさん）は低音，子どもは中間音，赤ちゃんは高音，ヘビは調を変えて弾くと，歩き分けた。

○事例21–2　「ニコニコ列車」で，テンポを上げてピアノを弾くと速い電車，遅いとゆっくりの電車になる。

22　サイレントシンギングをする（= 音，メロディー）

○事例22–1　「まつぼっくり」で，「さ」を抜いて歌う。「ごんべさんのあかちゃん」や「ちょきちょきダンス」で一部の部分を歌わずに動作のみするなど。

年長25　楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを考える

○事例25–1　子どもたちが曲にあった楽器を選び，分担して演奏していた。

●学年の考察

項目19では，この他に身体やマラカスなどを使って簡単なリズムを表す姿が多く見られた。項目23の「だしてひっこめて」の手遊びは遊びのバリエーションが豊富で，休符や三連符を取り入れてリズムを変える，音の高低やテンポを変えるなど，いろいろな楽しみ方ができた。作るリズムは，まず教師が示し，次に子どもと一緒に考え，最終的には事例23–1のように子ども自身が提案することができるようになった。当初，年少の項目16の「打つ」と年中の項目23の「表す」の違いがわからなかったが，事例を年中教師間で検討し，「打つ」は「表す」の一部ではないかと意見がまとまった。

項目20については，言葉だけでなくリズムでも応答的なやり取りをするようになった。教師のリズムに対し「心地の良い返し方」をしようとしていることが窺える。項目21については，学年での話し合いで，ピアノを速く弾くときは高音，遅く弾くときは低音で弾いていることが分った。速度と高低の結びつきは教師の先入観によるものなのか知りたい。項目22は，教師間の取り入れ方に差があった。保育に意識的に取り入れていくためには，項目に具体例など明記できると良い。年長の項目25の，楽器を選びどのように音を鳴らせば良いのか試す姿は年中児によく見られた。年中の項目に「楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを試して遊ぶ」として取り入れても良いかもしれない。

小分類：メロディー

30　身体運動や声を通して音の高低を表す

○事例30–1　各クラスで，弾いた音に合わせて子どもが動く遊びを行っている。高い音では，若い動きや軽やかな動きになる。低い音だとゆっくりで動き重たい印象の動きになる。

31　音の上行，下降，跳躍などを身体運動や声で表す

○事例30–1　「きのこ」で，「背がのびてくルルルル…」と上行するのにあわせて子どもの目と背中が伸びていき，その後伴奏のみ上行するところでも合わせて「ルルルル…」と歌った。

32　同じメロディー，違うメロディーに気づく

○事例32–1　「草競馬」のAメロBメロ場面で馬がどんな風に走っているか話し合った。メロディーに合わせて楽器の鳴らし方を変えたらと言う子がおり，どうやって鳴らすか一緒に考えた。

33　旋律的な言葉の応答をする

○事例33–1　「もういいかい」に対して子どもが「もういいよ」と応えた。「ほんとにほんとにもういいかい」には「ほんとにほんとにもういいよ」と応えた。生活の様々な場面で取り入れた。

34　応答的な旋律を歌う

○事例34–1　「やったー！サンタがやってくる」で，子どもたちは応答的な旋律であることを理解で

きず，全部歌っていた。教師が「まねっこおいかけっこごっこで歌おう」と言い，教師と子どもで応答的に歌っているうちに，慣れて，子どもたち同士のグループに分かれて歌って楽しんだ。

年少28　言葉を旋律的に表す

事例28–1　「立ちましょう」「座りましょう」「でーきーた！」と教師が言葉を旋律的に表すと子ども達が真似をする。

年長38　合いの手のような旋律に気付く

事例38–1　「バスにのって」の歌で，「バスに乗って揺られてる，go! go!」の部分は，合いの手であるが，年中の子ども達はまだ気がついていない。

●学年の考察

項目30の事例は少なく，その内容も教師間で様々であった。現年間指導計画の各月課題曲を歌えば「声を通して音の高低を表す」ことになるか。また，関連する年少の項目26の活動を年少時に見出していなかったこともその要因か。項目31についても事例があまり出てこなかった。その理由は項目48の「身体の運動が誘発されたり」の部分との明確な違いを理解できなかったからである。項目32に関して，たとえメロディーの違いに気づくような活動を教師が積極的に行っても，子どもが本当に気づくことができたのかわからない。この項目が教師にとって捉えにくい項目である。

項目33については，保育の様々な場面で旋律的な言葉の応答をしている。事例から，教師は①子どもに対して呼びかけるとき②子どもの興味をひきたいとき③子どもにしっかりと話を聞いてほしいときに活用していることがわかる。

項目34に関しては，どの教員も「やったー！サンタがやってくる」を事例にあげた。これは現存の年間指導計画に載せている歌であり，今回のカリキュラムと結びつけて考えやすい項目であった。

項目28は年少児では難しいのではないか。「言葉を旋律的に表していることに気付く」や「言葉を旋律的に表すことを真似る」等はどうか？項目38の事例から，年中に「合いの手のような旋律を感じる」という項目を入れてはどうか。

小分類：テクスチャ―

43　オスティナート系の手遊びをする

○事例43–1　「だしてひっこめて」「キャベツはキャッキャッキャ」「キューピーさん」「ちゃつぼ」「アルプス一万尺」

44　カノンを視覚的に理解する　事例なし

年長45伴奏の効果を知る

○事例45–1　「虫のこえ」の伴奏で，虫の声の「りんりん」「ちんちろ」の部分の高さや弾き方を変えることで子どもたちの歌声も変化した。

●学年の考察

オスティナート系の手遊びは多く取り入れており，子どもたち自身が遊びに取り入れ楽しんでいた。カノンは全く行えず，教師も理解が難しい。項目45については，伴奏の効果を知識として知るところまでは至らないが，その特徴を感じることはできたので，「伴奏の効果を感じる」とするのはどうか。

小分類：調性

46　長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ

○事例46–1　「立ちましょう」を「ドレミファソ」「レミファソラ」「ミファソラシ」などに合わせて言い，「ドレミファソ」の時だけ立つようにした。「ドレミファソ」でないと「悲しいね」と言うようになった。

○事例46–2　「ニコニコ列車」の音楽を短調で弾くと，脱線したり，「悲しい電車になっちゃった」

と言い，動きがゆっくりのそのそと変化したりした。

●学年の考察

調の変化や違いを敏感に感じ取り，言葉や動きで表すことができると分かった。

大分類：音楽の機能

48　音楽やリズムによって，身体の運動が誘発されたり，感覚が刺激されたりする

○事例48–1　「だいすきだい」「一本橋こちょこちょ」でくすぐることにより刺激

○事例48–2　「そうだったらいいのにな」で，歌うとひざでリズムを刻む。

49　音楽やリズムに共鳴し，情動が誘発される

○事例49–1　「おなかのへるうた」を歌うと必ず「おなかへったねー」と言い，腹部と背中をくっつけようとひっこめる。

○事例49–2　お話ごっこで物語や音楽に合わせて感情を表す。

50　音楽やリズムにより音楽的時間を共有する一体感を持つ

○事例50–1　合奏や歌でリズムがぴったり合ったときなど，「スッキリしたー！」という子が出てきた。

51　手遊び等により，数概念の形成，言葉の認識の深化，季節や行事の訪れの理解等が促進される

○事例51–1　数概念「一羽のカラス」「いっぽんでもニンジン」「ゆうびんやさん」

○事例51–2　言葉の認識「カレンダーマーチ」「おはなしゆびさん」「おにのパンツ」「あさがおこりゃこりゃ」「あおむしでたよ」「のぼるよコアラ」「おはながわらった（手話）」

○事例51–3　季節や行事「ちょうちょ」「こいのぼり」「だんごむしのうた」「かたつむり」「「シャボン玉」「とんぼのめがね」「虫のこえ」「どんぐりころころ」「もみじ」「きのこ」「ヤッター！サンタがやってくる」「赤鼻のトナカイ」「ゆき」「おしょうがつ」「まめまき」「うれしいひなまつり」

52　音楽やリズムがこどもたちの遊びとして存在する

○事例52–1　お話ごっこ　音楽をかけて踊る，踊って見せる，役になって遊ぶ

○事例52–2　「あぶくたった」「はないちもんめ」

○事例52–3　楽器コーナーで音あて遊び

○事例52–4　子どもたちのリクエストで「さんぽ」をかけると，クラス内の楽器コーナーのマラカス（どんぐり，砂，小石，ビーズなど）の音を選んで音を鳴らす姿があった。自分でつくったギロを使う子もいた。

○事例52–5　「にんげんっていいな」でタンブリンを持ってきてたたきながら踊り始めた子に合わせて，数人が一緒に振り付けを考え，回りながらや体を揺らしながら左右でたたいて合わせた。

●学年の考察

項目48については，音楽に動きが含まれているものや動きを想定して作られているものは運動的な動きにつながると思われる。現存の年間指導計画に多く含まれており，十分に楽しむことができている。項目49の「情動が誘発される」をどうとらえるのかが難しい。項目50については，日頃の遊びの中で音楽を共有して遊ぶことは多くみられた。項目51，52も十分に行うことができている。

「音楽の機能」の小分類の文面は素材や表現の仕方と異なっており，わかりにくい。教育要領にある遊びを通した総合的な指導やねらいと内容につながる部分であると思うが，学年の区別なくひとまとまりで示されているので，具体的にした方が良い。子どもの行動が述語となっておらず，「存在する」「促進される」という言葉をカリキュラムとしてどう理解するのか検討が必要であると思われる。

大分類：音楽の表現対象

55　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴を生かして歌う

○事例55–1　「ちょうちょ」「だんごむしのうた」「かたつむり」「とんぼのめがね」「虫のこえ」「ゆき」「どんぐりころころ」「きのこ」「もみじ」

56　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴を生かして歌う

○事例56–1　「おなかのへるうた」を歌うとおなかを引っ込めて背中にくっつけようとする。

○事例56–2　「シャボン玉」「どんぐりころころ」

○事例56–3　お話ごっこ

●学年の考察

音楽的特徴を生かして歌うとはどのようなことなのか理解が難しい。「音楽の表現対象」の意味も理解できていないので教えてほしい。

◎学年の総合的考察

カリキュラムの「音楽の素材や表現の仕方」の「音」「リズム」「メロディー」は，比較的事例も多く，具体的な事例が多く挙がった。その理由として，第一に当初，園内研修を進めるにあたり「身近な音に対する感覚を豊かなものにするために必要な教師のかかわりや環境構成は何か」を年中学年のテーマとしたためである。第二に，カリキュラムの「音」「リズム」「メロディー」の小分類にあるそれぞれの項目の内容が具体的に示されており，教師が子どもの活動と結びつけやすかったことが挙げられる。

「音」「リズム」に関しては事例数が多い。項目の意味を正しく理解できていないまま事例を分類した面がある。分類の仕方や項目について正確に共有できていない。

「音楽の機能」「音楽の表現対象」の小分類の各項目は，「音楽の素材や表現の仕方」に比べると，抽象的な感じを受け，理解しにくいという意見が出された。この「音楽の機能」「音楽の表現対象」の小分類は，表現活動の「核」となるものであり，表現分野のねらい達成のために取り組んだ事例が多数ある。しかし，日頃の多岐にわたる表現活動や遊びがどの項目に結びつくのか曖昧になってしまった。

カリキュラムの再構築という観点で捉えたとき，これまでの年間指導計画と本カリキュラム案には隔たりがある。これまで，年中は現存年間指導計画の「友達と一緒に」「楽しむ」をキーワードにして表現活動に取り組んできた。カリキュラムにそのキーワードを盛り込んだ項目にしてはどうか。また，現行の年間指導計画に示されている具体的な内容と項目とが関連しているものが比較的多くあることがわかった。今回のカリキュラムの項目に合わせ，現行の年間指導計画の分類を紐付けすると，実践で活用できるカリキュラムの再構築を図ることができるのではないか。さらに，あまり取り組んでこなかった項目について具体的な遊びや曲を組み込むと経験に偏りがなくなると思われる。

資料2のように，年中で事例がなかったのは項目44「カノンを視覚的に理解する」のみである。日頃の保育の中でカリキュラムの項目を非常に意識して事例を集めたり，事例となるような活動や遊びを設定しようとしたりしていたことが窺える。

また，小分類ごとに考察が述べられており，その考察には，カリキュラムについての疑問だけでなく，カリキュラムの効果や提案が織り交ぜられ，積極的な検討が見られる。

特に年中で生き生きとした事例が多く見られるのは，項目10以外の小分類「音」「リズム」である。「音」では，年少に該当する項目の事例から拾い上げ，活動を見通して

いっている。「リズム」の項目についても，項目20の応答的な活動や21のイメージと速度についての活動では多くの事例があがった。考察では，カリキュラムの項目の内容が具体的であるので子どもの活動を結びつけやすかったという評価もあがっている。

しかし，項目の意味をとらえきれなかったという考察もあるように，項目の中には，共有理解が得られていないものも多い。

まず，項目６「長い音，短い音に気づく」では，年少と同じようにリズムの長短との誤解が見られる。項目10「音を色や形で表す」は，年少で同様の項目４に事例がなかったように，年中でも造形表現との関連を考えて戸惑っている様子がわかる。項目30，31についても事例が出にくかったと記載されている。項目30の身体運動などで音の高低を表すことに事例が少なかったのは，後の章の資料３にある年長で生き生きと活動した事例が見られたこととは対照的である。項目31の音の上行，下降，跳躍については，大分類「音楽の機能」の項目である項目48にあるような身体が誘発されることとの違いがわからなかったと記されている。これは，大分類同士は相互に関連し合っているというカリキュラム案の趣旨からすれば，どちらにも関わった事例のはずであるが，その点の共有理解も不足していたことがわかる。項目32「同じメロディー，違うメロディーに気づく」は，事例にもあるように毎年「いきいきDAY」（発表会）では，曲に簡易楽器を組み合わせた演奏をしているところから，その頃にはメロディーに合わせた遊びが展開され，メロディーに応じて子どもの身体表現の変化等が表れてくるだろうと想定したが，考察ではとらえにくいと記載されている。また，小分類「テクスチャー」の中で，カノン系の活動については，年少でも疑問が出ていたように，年中でも困難であると感じられており，オスティナート系の遊びであげている楽曲は「アルプス一万尺」以外は該当しないものになっている。

「音楽の機能」や「音楽の表現対象」については，年少と異なり，とらえ方が難しいとの記載が見られるが，一方で，それらは「表現の『核』となるもの」と記載されている通り，年少と同じく，保育の念頭に置くことが意識されている。

４．年長担任・副担任による事例と学年の考察

資料３

年長　園内研修　最終レポート

大分類：素材や表現の仕方

小分類：音

年少１　身のまわりの音に気づく

○事例1–1　廃材や身の回りにある物で音を鳴らす「ガチャガチャ音楽隊」という活動を行った。子どもたちが一緒にリズムや合図を合わせるなど，まわりとの共鳴を楽しむことを目的とした活動である。その後，いい音がする物があったら箱に入れるようにすると，遊び中叩いたり擦ったりして音が出ることに気付いたり，ダンボールを切る時に音が鳴ることに気付いたりするようになった。

○事例1–2　Yが太鼓をずっとバチで叩いていたので，どんぐりをさりげなくそこに置いてみた。叩きながらどんぐりが動くのを見て，オッという表情をする。そのうち，強く叩いたらどんぐりが高く跳ぶとわかり，強・弱を繰り返してどんぐりの動きを楽しんだ。その後，興味を持った男子たちが集まって，キャップをのせて遊んだ。教師がわざと弱く叩き，太鼓は振動してもキャップは動かないことを示し，「何で跳ばないんだろう？」というと，「キャップは重いからその重さに負けない強さで叩かなきゃいけないんだよ」と言った。

年中5　身の回りの音を聞き分ける

○事例5–1　「みんなはたくさんの音が聞こえるんだよ。目をつぶって静かにしてみようか」と耳を澄ませると，「車の音」「○○先生の声」「バイクが走ってる」など，次々に答えた。「どんな風に聞こえた？」と聞くと，「ぶーー」「がったん」「あのねー（○○先生の話し声）」と，口々に話した。

年中7　音色を聞き分ける

○事例7–1　小さな鉄琴を子ども達のいないときに「なかよし広場」のシロフォンコーナーに置いておいた。気づいた子が鳴らすと，シロフォンとの音色の違いや響きに次々と興味を示した。その日の降園時，いつものピアノの代わりに鉄筋を鳴らしてみた。すると，子ども達は一気に集中し，その流れで歌の伴奏を始めた。鳴らす教師の横に「きれいな音だね」と歌いながら何人か来て歌った。また，いつもあまり歌わない子もみんな歌い，みんなで歌っている感覚が得られた。その後もしばらく，鉄琴伴奏で行い，響きを楽しんだ。

年中8　楽器の鳴らし方を工夫する

○事例8–1　Eがシロフォンを楽しそうに力強く叩いて遊んでいると，近くにいたMが「Eちゃんうるさい！」と伝えた。するとEはシロフォンではない床やマラカスを叩いて遊びはじめた。自分の力加減は調整できないが，「うるさい」と言われたことに反応している。

11　音の立ち上がり，減衰に気づく　事例なし

12　イメージにあった音色，声色，強弱を選ぶ

○事例12–1　「ガチャガチャ音楽隊」を何度か行った。廃材から「いい音出るよ」と見つけたり，「馬が走る音みたいだ」とままごとの茶碗を交互に床で打って音を鳴らしたりしていた。

○事例12–2　劇の音を身の回りの楽器や廃材，ハモンドで探した。「ちょっとさみしすぎる」「お祭りみたい」「昔話みたいな音だからこっち」など，雰囲気や情景に合わせた音を選ぶことができた。

○事例12–3　庭にどんぐり拾いに行った。プラスチックトレーに入れて持ち上げるといい音がした。「あ，何かの音に聞こえた」というと，子ども達も耳を澄まし，「海？」「波？」と感じ取っていた。「○○くんの波の音聞かせて」というと，ゆっくりとどんぐりを動かして波を表現した。

13　音の強弱を知る

○事例13－1　1学期に「拍手で宝探し」[5]を行った際には拍手の強弱を理解している子が少なかったが，2学期になると，宝の場所に鬼が近づくにつれて拍手をだんだん大きくし，通り過ぎると小さくすることができた。鬼もその反応からこの辺りかなと周りを探すことができていた。

14　複数の音をグループで色や形に表し，再現する　なし

●学年の考察

仲良し広場に自由に鳴らせる楽器を設置しておいたことは，楽器の音の違いに気付いたり，鳴らし方を工夫したりする姿につながったようだ。教師が意識してこのような環境を整えることは

大切である。

また，「ガチャガチャ音楽隊」の取り組みは，楽しみながら音を聞き分けたり，鳴らし方を工夫したりする姿につながった。行った後の子どもの姿には年少，年中の項目に当たるものが多く見られた。年少，年中でも取り入れてみると良いのではないか。子どもの姿から，年少の 1，年中の 5，7，8 の項目は引き続き年長で取り扱っても良いのではないかと考える。

音付き紙芝居で身近な物を使って効果音をつくったり，「ガチャガチャ音楽隊」で楽器以外の音で表現を楽しんだりしたことにより，劇ごっこでイメージに合った音探しをする姿につながったと思う。

「拍手で宝探し」[5)]が 1 学期のころよりも大いに盛り上がったのは，拍手の大きさを変えることがゲームに必要なことだと理解でき，強弱のつけ方も上手にできたからなのかと感じた。何度か経験しているうちに，音の強弱をつけることができるようになるようだ。クラスで遊びの 1 つとして取り入れると良い。

項目 14 について，これを今の椙山幼稚園のカリキュラムに取り入れることは難しいと思う。仲良し広場でやりたい子どもが行うような遊びとしてやってみることはできるかもしれない。

小分類：リズム

23　拍に合わせて簡単なリズムを作って表す

○事例 23－1「だしてひっこめて」の曲の手拍子の部分に間合いを入れると，数人の子が興味深く参加した。教師の間合いに見事ついていけた子が「やった！ できた！」という声を上げると，周りの子も興味をもって，間合いやリズムを必死に聴き，真似しようとした。次の日，再び間合いをとるような伴奏にしたところ，すぐにクラスの多くの子が参加し，リズムにあった時には喜び，合わなかった時には次の伴奏をより注意深く聴く姿があった。

○事例 23－2 部屋遊びの時間に CD デッキの前に椅子を並べ，コンサートごっこを始めていた。音楽をかけ，リズムよく楽器を鳴らす子，自分の叩きたいように自由に叩く子がいた。夕涼み会で行った竹打ちの曲を流してリズム打ちを楽しんでいる子もいた。

24　簡単なリズムの応答をする

○事例 24－1　1 学期から「もういいかい」のピアノの音で弾いて集まるようにしていた。それを様々なリズムや音，速さに変えると，当初は反応できなかったが，徐々に気づく子が増え，同様に「もういいよ」を返すようになった。この日は普通に何度も「もういいかい」を弾くと，用意のできた子たちから色々なリズムや音で返ってきた。

25　楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを考える

○事例 25－1 学年で「N くんがカホンを通りすがりに蹴って音を鳴らしていた」と報告すると，「なかよし広場」に色々な音が出せる廃材や楽器を置いてみようという話になった。そこで，カホンと卵マラカスを同時に使っている女児のもとに，シンバルをハンガーラックでつるした。シンバルを 3 つかけると，数名がマレットで叩いて遊び始めた。ウッドブロック，廃材の空き箱，タンブリンなどを持っていき，「これは，どこの位置がいい？」と聞くと，きちんと考えて答えた。設置すると，カホンをその前に持ってきて，ドラムのようにあちこち鳴らして楽しんだ。足をドンと鳴らす子も出てきたので，足にも音が出るものはないかと卵パックを探した。

●学年の考察

「だしてひっこめて」でリズムづくりをしてきた。年少と年中までは，カリキュラム項目に「サイレントシンギング」が組み込まれている。年長はないが，「サイレントシンギング」を経験することで，「休符を感じる」や「ウラ拍がとれる」ことができるよう発展して，年長の「拍に合わせて簡単なリズムを作って表す」という項目になるかと年長間で解釈している。「だしてひっこめて」

のリズムは教師が作ったので，「作って表す」ことを子ども達が考えてもよかったのではないか。それができたら，「いきいきDAY」の合奏等で子ども達が主体でリズムを考え，組み合わせてつくれたかもしれない。

子どもにとって，楽器遊びのとりかかりは，とにかく乱打して楽しむことから始まるように感じた。次第に曲を意識して鳴らすことを楽しむように自然に変化していった。また，耳慣れた曲が流れていると，いろいろな楽器を使って上手に合わせて表現することができるようになっている。ただ，音階のある楽器（シロフォン，鉄琴など）は，ピアノ等を習っていて音階が分かる子は，メロディーを叩いてより楽しめていたが，分からない子にとっては，シロフォンもリズム打ちで楽しんでいたにとどまった。しかし，音楽がいつでも流せる環境や多種の楽器がすぐ手に取れる環境によって，子ども達から自然に表現遊びが出てくることがわかった。シロフォンなどをメロディーで弾く子に憧れて，聞いたり見たりして覚え，興味を示して遊んでいる姿が見られ，友達から刺激を受けている様子がうかがえた。

項目24では，「もういいかい」「もういいよ」がやり取りあそびだということを子どもたちは経験でわかっており，きちんと応答することができていた。リズムはもちろん，音の高低，速さ，音感も音の遊びとして手軽に楽しむことができた。ノーマルな弾き方に対していろいろなリズムや音で応答して来たのは，それまでに経験してきたことで子どもなりに音やリズムなどを工夫してつくりだせたことになる。

事例25−1は，教師が選んだ材料，楽器だったので，子どもからの発信を待った方がよかった。また，その後，年中が一気に集まってきて遊び始めたが，その遊び方は年長と違って，楽器を外して遊んだり，鳴らし方が雑であったりしていて，遊び方の違いがはっきりみえた。

楽器遊びに関しては，いろいろな音の出る楽器を自由に触れる環境を用意したことで楽器にたくさん触れて楽しめた1年であった。「なかよし広場」に楽器を置いたことで，トイレにいく時，通りすがりに音をだすということでも，音を楽しむ，楽器に触れるという意味があったと思う。子どもたちなりにその組み合わせを考えたり，順番に連打したり全身を使って遊ぶことができていた。また，その継続から，劇ごっこの中に合う音探し，選択，この音はどうかなど聞き分けることができるようになってきていた。ただ，広場のものと保育室の物を組み合わせて使う様子はみられなかった。広場にあるものはどちらかというと「珍しい楽器」で保育室の物は「通常の楽器」という位置づけなのかもしれない。広場用として，保育室にあるものも1つずつくらい置くなど，置き方も考えていかなくてはいけない。

小分類：メロディー

年中30　身体運動や声を通して音の高低を表す

○事例30−1　教師が音の高さを手の動きで表したところ，それを何人かの子が真似して楽しんだ。その後，自分たちで，色々な歌を歌いながら音の高低を手で上下させて表現して楽しんでいた。

○事例30−2　ドレミファソラシドのピアノに合わせて，音の高低をしゃがんだり背伸びしたりして表現する遊びを行った。また，ランダムに高い音や低い音を弾くと，寝転がったりジャンプしたりしながら，音の高低を自分なりに表現して楽しんだ。

年中33　旋律的な言葉の応答をする

○事例33−1　教師が富士サファリパークの話をすると，近くにいた子が富士サファリパークの歌を歌い出した。何度も歌っていると「それー何回言うーの」と替え歌をして会話に取り入れていた。

35　楽曲のフレーズと息継ぎに気づく

○事例35−1　子どもたちが2人でシロフォンをオクターヴ違いで弾いていた。「もう一回弾いて」と言うと，1人が「じゃあ途中から入るね」とフレーズの切れ目から入り，息ぴったり

で演奏した。

36　応答的な旋律を歌う

○事例36–1　「ぽかぽかてくてく」の「さぁ（さぁ）いこう（いこう）」のメロディーの掛け合いをした。

37　三部形式を身体運動で表す　なし

38　合いの手のような旋律に気づく

○事例38–1　「バスごっこ」「ながぐつマーチ」や，「いきいきDAY」（発表会）の劇で歌った「やれひけそれひけ」（♪ローラーひきは楽しいな（にゃご！））等が該当すると考えられる。

39　階名模唱で音高をとらえる

○事例39–1　鉄琴鍵盤がバラバラになっており，Sが「わあ気持ち悪い」と笑った。その笑いに集まってきた周りの子にも聴かせると，「気持ちが悪い〜」と言って笑う子と，違和感を感じない子がいた。その後，「先生，バラバラ直したよ」とSとRが嬉しそうに知らせに来た。順番に鳴らして「気持ちいいでしょ」と言った。周りの子も「ほんと気持ちがいいね」と何度も鳴らした。

●学年の考察

事例30–1は，教師の働きかけから始まった表現遊びである。年中の項目ではあるが，今まで行っていないので，年長児も楽しむことができた。年長の項目39につながっていくのであれば，年長にも「身体運動」を使って音高をとらえたり表したりするスモールステップ的な項目があると良いのではないか。

事例33–1は，子どもたちから自発的に出た，耳なじみのある短いメロディーの言葉遊びである。事例35–1は，普段からいつでもシロフォンを触って友達と楽器遊びができる園の環境と，習い事などで旋律をよく知っていることなどから，遊びが生まれたと考えられる。この2人は，普段から一緒に遊んでおり，お互いのテンポ感をくみ取り，演奏することができているのではないかと感じる。項目36は，これまでの年間指導計画にはないが，子どもたちが知っている歌：「もりのくまさん」「大きな歌」「アイアイ」なども応答的な歌である。「応答的な旋律」が含まれている楽曲は，子どもたちにもなじみやすく，わかりやすいので積極的に取り入れていきたい。項目37は，「世界中の子どもたちが」で可能かと考えられるが，カリキュラムでは年少・年中で三部形式について全く触れられていない。スモールステップで，まず「三部形式を知る」だけでも良いのではないか。事例39–1は，音の高低を耳で感じ取り，並べ替えができている。階名をとらえてバラバラになった鉄琴を直せたことから，項目39に直接は当てはまらないが，関連する事例と考えられる。

小分類：ハーモニー

40　単旋律と複旋律の違いに気づく なし

●学年の考察

単旋律と副旋律の違いの気づかせ方がわからない。ハモるということであれば年長児にはむずかしい。

小分類：テクスチャー

45　伴奏の効果を知る

○事例45–1　シロフォンコーナーで，「かえるの合唱」のメロディーを弾いている子どもたちに「順番にずらしてひいてみない？」と提案し，方法を伝えると，すぐに理解して輪奏が成功した。鉄琴やもう一つのシロフォンを増やしたりしてやると，最終的に6人ぐらいで輪奏が成功した。

○事例45–2　お楽しみ会で，代表の子たちが「かえるの合唱」の輪唱・奏をシロフォンや歌で披露した。その後，年長全員でクラス単位で輪唱・奏をした。代表の子の見本が子ども達

に理解できたのか，みごとに成功した。お楽しみ会が終わってからも保育室で輪奏している姿や，いつもシロフォンを触らない子がチャレンジしている姿や，シロフォンで輪奏に挑戦して友達の弾く音につられてうまくいかずなぜかと考えている子の姿もあった。

●学年の考察

事例45−1では，以前に年長で「歌」で輪唱を試みた時まったくできなかったので，今回できて驚いた。自分のパートに集中しつつ，周りの音やそのテンポを感じ取りながら楽器の演奏を楽しむことができた様子である。

年少・年中の項目に入っているオスティナートとカノンが，どのようにして【伴奏の効果を知る。】につながっていくのか考えても理解できなかった。勉強が必要である。オスティナートの遊びが当てはまる曲としては，年間指導計画にある手遊びや伝承遊びである「はないちもんめ」「アルプス一万尺」「にこにこでんしゃ」「オクラホマミキサー」「ジェンカ」「マイムマイム」などがあてはまるか。

小分類：調性

47　長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ

○事例47−1　Kがシロフォンで「ロンドンばし」を弾いていた。ドから始まる「ロンドンばし」，ミから始める「ロンドンばし」等いろんな音から始めていたので，「この音から始めるとどうなる？」と聞くと「この音からだとこうかな？」と考えながらシロフォンを叩いた。

●学年の考察

ピアノなどを習うなどして，音階や長調・短調を知っていたりする子には気付きやすい項目だが，多くの子は難しい。これまでの年長児の年間計画を見直すと，短調の曲が一曲もないので，もっと積極的に年間計画に入れるとよい。長調の曲を短調に変えて子どもに何げなくおろしてみた時の反応をみてみたい。

大分類：音楽の機能

48　音楽やリズムによって，身体の運動が誘発されたり，感覚が刺激されたりする

49　音楽やリズムに共鳴し，情動が誘発される

50　音楽やリズムにより音楽的時間を共有する一体感を持つ

51　手遊び等により，数概念の形成，言葉の認識の深化，季節や行事の訪れの理解等が促進される

52　音楽やリズムがこどもたちの遊びとして存在する

○事例48・49・50−1　「みんなおおきくなった」のCDをかけながらみんなで歌っていると，自然に体を揺らしたり友達と肩を組んだり手をつないで振ったりしながら歌う。その後も，ピアノ伴奏で歌っていても揺れながら歌う子がいる。（ほかの歌では見られない現象）

○事例48・52−1　給食後，「なかよし広場」で子ども達が好きな曲をウォークマンから選択して流せるように環境を整えた。始めは運動会のバルーンの曲「ドラえもん」を流していたが，終わると「パプリカ」や「U・S・A」などで踊ったり歌ったりして楽しむ姿が見られた。

○事例48・52−2　リズムジャンプを楽しみながら，合わせてジャンプし（体を動かし），楽しむ。また，4拍でできるジャンプの仕方を個人や友達と一緒に考えて楽しんでいる。

○事例51−1　「たいせつなたからもの」の曲を歌う前に，「みんなの大切なたからものは何？」と聞くと「おもちゃ」「サンタさんからもらったプレゼント」などのものが挙がった。その後で，この曲の歌詞をクラスみんなで読み解いた後で同じ質問をすると，「友達」「幼

稚園でやったこと」「家族」などが挙げられた。

○事例52–1　降園準備の時間に子どもたちが「どうぶつえんへいこうよ」を全て「ド」だけで歌い始めた。この曲は曲調や歌詞が子どもたちに人気で，普段から口ずさんでいる子も多い。

●学年の考察

現在の年間指導計画にこの分類に当てはまる内容が多くあり，遊びにおいても自然と取り入れられている。また，普段の保育においても教師が意識して環境を整えたり，働きかけたりしている部分である。一方，年長では，友達と一緒に楽しんだり活動したりすることが多く，年間指導計画でもその部分を大切にしているが，その項目があまりないと感じた（「共有する」に含まれているのかもしれないが)。「友達や教師と一緒に〜」のような項目，小分類があると良い。

大分類：音楽の表現対象

57　自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴を生かして歌う

●学年の考察

年間指導計画の「めだかの学校」「こいのぼり」「ふるさと」「たなばたさま」「シャボン玉」「とんぼのめがね」「どうぶつえんへいこう」「お正月」「ゆき」「クリスマスソング」「うれしいひなまつり」卒園式の歌が該当する。

58　ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴を生かして歌う

●学年の考察

「あめふりくまのこ」「大きな古時計」が該当するのではないか。

59　登場人物の感情に合わせて，表現する。

○事例59–1　犬になりきって遊んでいた子がいたので，ストーリーを教師が作りながらピアノを弾き，犬ごっこをクラスみんなで行った。ピアノの音の高低や速度の雰囲気に合わせた動きや，ストーリ内での犬の気持ちに合わせた表情や動きをしながら楽しんでいた。

●学年の考察

音楽の表現では，感情（楽しい，美しい，怖い，寂しい，悲しい，嬉しいなど）を，様々な活動を通して感じられることが多くある。また，イメージを歌や動きで表現して楽しむことがこの小分類には含まれるのであるとすれば，感情を揺り動かす，イメージを膨らませるような項目があると良い。

また，劇遊びにつながる小分類だと考えるので，ここにおいて，友達と考えやイメージを伝え合いながら経験できる項目も必要だと思う。今までは，絵本やお話からイメージを膨らませて活動していたが，ストーリー性のある歌を動き（表現し）ながら歌ったり，歌からイメージを膨らませて劇遊びにつなげたりして楽しむ活動をすると面白い。

小分類外：その他の音楽表現活動

事例 1　ある子がトイレットペーパーの芯をつかってシロフォンやバチを作った。それを見た他児も作り始める。ラップの芯も使って，長さを変える。「だって，シロフォンって短い棒からだんだん長い棒になってるじゃん」。作ったバチは，他児が本物のシロフォンの横に置いていた。

事例 2　絵本『音』を読み聞かせした。M が，なかよし広場のフック掛けにトライアングルをかけた。「この前の（絵本の中の）トライアングルの触るやつをやりたかったの」と音を鳴らし，触る方法を考えていた。その後クラス全員でトライアングルに触る。「震えてる」「ビビビーってなる」「ちがう。揺れてる」。そこで，絵本の続きを読んだ。「振動が周りの空気に伝わり，その振動が耳に伝わることで音として聞こえる」。子どもたちはよくわからない表情だが，身近な楽器が震えるかどうか調べ始めた。シロフォンは「震えない」，鉄筋は「震えてる」カスタネットは「分からない」，タンブリンは「少し震えてる」，シンバルは「めっちゃ震えてる」，太鼓は「震える」。「これは木だからじゃない？」「トライアングルも硬い

鉄だから？」など楽器の素材に気づく子がいた。

●学年の考察

集団ならではの表現の発見や刺激を受けることがある。「認め合い，刺激を受けて自分の活動に取り入れる」などの項目や小分類があると良いのではないか。

音楽と子どもの遊びは密接につながっており，音楽表現だけで完結するのではなく，全ての分野と相互に関係していくと感じた。教師の留意点として，運動，環境，制作表現，言葉，人間関係の分野とのつながりを意識し，遊び進められる環境作りを大切にしていく。

◎学年の総合的考察

現幼稚園教育要領に準じた年間指導計画のねらいや内容，方法は，大分類「音楽の機能」や「音楽の表現対象」の比重が大きいと分かった。一方，大分類「素材や表現の仕方」の項目内容はあまり意識していなかった。今回，「素材や表現の仕方」の各項目に該当する遊びや活動が楽しめるような環境を整えたりしたことがきっかけで，子どもたちの音楽活動の幅が広がり，新たな音楽遊びにつながり，教材研究や楽器の素材研究を行っていく大切さを感じた。また，子どもが生活する中で自然と音楽遊びや活動に楽しめる環境にするには，教師の意図した音楽活動環境づくりも必要だと改めて感じた。

音楽の技能的な項目においては，年長であっても難しいと考えられるところもあり，理解して楽しめる個人差も大きいため，指導計画に取り入れることは話し合いが必要だと思われる。また，年長であっても，年少・中の項目であれば楽しみ，達成できることが多いと感じたので，調整できれば良い。

また，音楽活動や遊びを通して，周りの友達や教師と様々な気持ちや活動を共有し，認め合えるような分類項目があると良いと考える。音楽表現だけで完結してしまうのではなく，他分野とのつながりを大切にしていくと，子どもたちならではの楽しい遊びや活動につながるので，十分にできるような時間や空間の確保も同時に大切にしていけると良い。

資料3のように，年長も小分類ごとに考察しており，分類外の事例も掲載しているなど，事例からカリキュラム検討を積極的に行っていることがわかる。

年長で事例があがらなかったのは，項目11「音の立ち上がりや減衰に気づく」，項目14「複数の音をグループで色や形に表し，再現する」，項目37「 三部形式を身体運動で表す」，項目40「単旋律と複旋律の違いに気づく」の4項目であった。

項目11「音の立ち上がりや減衰に気づく」は，年少の項目1「身のまわりの音に気づく」，年中の項目5「身のまわりの音を聴き分ける」項目6「長い音，短い音に気づく」の次の段階として設置していた。項目1や5で生活や自然の音を含めた身のまわりの音に耳をすませ，何の音だろうと考えたり聴き分けたりすることを経て，項目6で「どん」と短く聞こえたのか「じーっ」としばらく聞こえたのかといった，音の長さやアーティキュレーションに気づいていき，項目11で，長短だけではなく，どんな風に音が立ち上がったかを感じたり，音が聴こえなくなるまで注意して聴いてみたりする，ということを想定していた。実際に，年中児らが空から聴こえる音が飛行機か雷かと気にして，「音がだんだん遠くに消えていったから，飛行機だ」と会話している出来事があったことなどを考え合わせると，事例がない訳ではない。項目と

関連させてはとらえられていないということであろう。

また，項目14「複数の音をグループで色や形に表し，再現する」は，年少の項目４「音を色や形でとらえる」，年中の項目10「音を色や形であらわす」の次の段階の項目として設置していた。この項目は，いずれの学年にも不人気であった。しかし，音が色や形で示された絵本はいくつかある[3)]。たとえば，『もこ　もこもこ』[4)]では，「モコモコ」「にょろにょろ」という擬音とともにその音のイメージが色や形で描かれている。カリキュラム考案時は，年少児はそのような絵本から音が別の形で表されている面白さを感じ取り，年中児では自分たちでも「シャラシャラ」となる音，「ドン」となる音などを描いてみる，年長児は描いた色や形をまた音にしてみる，ということを想定していたが，保育現場ではかなり違和感を感じる活動であることがわかる。

項目37「 三部形式を身体運動で表す」は，年少～年長の項目29・34・36「応答的な旋律を歌う」，年中の項目32「同じメロディー，違うメロディーに気づく」に続く項目である。年長の考察では，年少・年中で全く触れられていないので，「三部形式を知る」だけで良いのではないかと述べられている。しかし，「三部形式」は，単純に言えば「同じメロディー－違うメロディー－同じメロディー」の組み合わせであるため，カリキュラム案では，年中の項目32の気づきを身振りで表してみようという設定であった。このような考察も，学年間の段階を十分に共有理解し得なかった状況を表していよう。

項目40「単旋律と複旋律の違いに気づく」は，年長だけに入れた項目である。考察では，「気づかせ方がわからない」という記述が見られる。この項目は，単旋律だけではなく，重唱（奏）や合唱（奏）になった時の面白さを感じることがねらいであったが，その前段階として，「和音の響きを感じる」という段階が必要であったとも考えられる。

また，小分類「テクスチャー」においても，とらえ方に誤解が見られた。「テクスチャー」は，複数の声部が織りなす音の様態を指すので，ある一定のリズムやメロディーのパターンの上にメロディーが重なる様子や，音やメロディーがずれて重なっていく様子，歌っている曲に歌の旋律に重なる音やハーモニーがついている様子などをとらえさせることをねらいとした項目であった。そのため，年少・年中でカノンやオスティナートをとりあげ，年長で伴奏の効果をとりあげていた。しかし，オスティナートについては，年少に記載がなく，年中・年長では，オスティナートではない遊びが例としてあげられており，「アルプス一万尺」以外は，応答的な遊びや，リズムや動作にのった遊びの曲になっている。また，年中にカノンの事例はなく，年長の項目45「伴奏の効果を知る」の事例がいずれもカノンの例となっていた。年長の考察では年少・年中のカノンやオスティナートが項目45にどのようにつながるか理解ができなかったと記載されている。

一方，年中の項目30「身体運動や声を通して音の高低を表す」については，年長ではカリキュラムをきっかけに行っており，年中とは異なり，楽しめた様子が記録さ

れている。

また，考察は，カリキュラム案を比較的肯定的に評価し，次の実践やカリキュラム改訂に向けた提案が見られるものになっている。特に，カリキュラム実施にあたって「仲良し広場」（年中との共有スペース）に園児が自由に鳴らせる楽器を設置したこと，これまでの保育では「音楽の機能」や「音楽の表現対象」に比重が置かれていたが，「音楽の素材や表現の仕方」に沿って遊びや環境を整えていくことで音楽活動の広がりや新たな音楽遊びを生んだととらえていることが特徴的である。

大分類「音楽の表現対象」で3学年共通していたのは，項目57「自然や動物などを歌った歌をその音楽的特徴を生かして歌う」で，事例ではなく，曲名等があがっていることである。それらの歌は，普段歌っている歌から自然や動物に関わるものをあげたようにも見える。年長に至っては，「お正月」「たなばたさま」「うれしいひなまつり」，卒園式の歌など季節や行事に関連した歌まで含まれている。季節や行事に関わる歌を歌う大きなねらいは季節感や行事の楽しさを味わうことにある。それ自体は幼児期の生活にとって重要なことであるが，その中では音楽は季節や行事の楽しさを味わうために機能していることから，大分類「音楽の機能」の項目51に該当する活動と考えられ，音楽的特徴を生かして歌うという項目57の内容とはひとまず異なるものである。ここでは，たとえば「コンコンクシャン」が，「りすさん」や「つるさん」，「ぞうさん」などの体の特徴や動物のイメージを強弱や速度，伴奏などの音楽的特徴に表しているように，音楽的特徴が生かせられるような歌を選ぶ視点として理解したい項目である。

5．カリキュラム改訂に向けて

これまでに述べてきた園内研修検討結果から，カリキュラム改訂を次のように行う。

まず，小分類「メロディー」部分の項目の文言修正を修正し，整理する。

年少においては，項目28「言葉を旋律的に表す」の文言を変え，28′「言葉に抑揚をつけて遊ぶ」とした方が，具体的に思い浮かべやすいかと考える。また，年少の項目29「応答的な旋律を歌う」は，年中34，年長36ともに同じ項目であるが，応答的な旋律は，年中で経験が出ている。したがって，年少では，「応答的な言葉のやり取りを楽しむ」が適当であろう。先にも述べたように「入れて」「いいよ」といったやり取りは年少時もみられ，仲間関係の構築に重要なやり取りであるが，そこでは自然に抑揚をつけることで，音楽的なやり取りの心地よさを感じ取っている。

この小分類「メロディー」については，そのとらえ方が難しいという学年の考察があった。「メロディー」を概念としてとらえていくためには，まず音高の違いを感じ取り，各音の音高の並びによって上向きの旋律，下向きの旋律，また跳躍する旋律等が生じることを感じとる，あるいは用いる音の種類や性格によって旋法や調が生まれ

ることを知る，音の並びのパターンによって形式が生まれることを理解していくなどの方向が考えられる。このカリキュラムが，そのような方向の土台として，幼児期に見つけ，遊ぶことができる活動や体験をつくっていくということを再度共有理解したい。

また，最も困難な状況が見られたのが小分類「テクスチャー」である。年少では，小分類「テクスチャー」のオスティナートやカノン系の遊びも見られなかった。オスティナートやカノンは，歌でハーモニーを経験することがない幼児期において，音の重なりを感じる体験になるものであるが，それらに対する理解がまだ得られていない状況である。オスティナートは，たとえば，Queen の ‘We Will Rock You’ やラベルの「ボレロ」などを思い浮かべると大人はイメージをつかみやすいと思われるが，幼児の遊びでとなると結びつかない様子である。よく知られた遊び歌では「おちゃらかほい」の手の動作に見られ，「汽車は走る」などでも，♪ガッタンゴットンガッタンゴットン♪と唱えるグループに合わせて歌えば，簡単にオスティナートが楽しめる。カノン系としては，わらべうた「ほたるこい」やリズム感のある詩（谷川俊太郎の「ことばあそびうた」等）をずらして歌ったり読んだりする等の活動が考えられる。また，わらべうた「べんけいが」などは，カノンのように追いかけても，「べんけいが」の部分をオスティナートにしても遊べる。このようにわらべ歌や詩など，音程を気にしなくてもいいものから繰り返しやずれを楽しむことが想定できるが，オスティナート系の遊びを年中が多く行っていたことから，全体的に年中からの項目で充実させる。

さらに，年長だけに設定している項目45「単旋律と複旋律の違いに気づく」は，先に述べたように「和音の響きを感じる」に修正する。ハンドベルやトーンチャイムの響きを鑑賞するなどの機会から，見聞きすることが想定できる。

その他，各学年から出された提案については，以下の資料 4 のように取り扱いたい。

資料 4

年少：項目51は広範囲にわたるので，①数②言葉③季節に分けても良いのでは。

この項目は，手遊びが①～③といった他分野とかかわりながら音楽表現としての面白さを感じとっている状況をとらえたものであり，それらがまんべんなく含まれるようにとねらったものではない。このようにわけると，①～③が含まれるものを探していくというような傾向が見られるため，今回のカリキュラム修正では行わずにとどめておく。

年少：項目53には歌以外のリズムは含まれないのか。

自然や動物などを歌った歌を対象としていたが，今回の事例では，年少で，曲からイメージしたり，そのイメージをリズムにあらわしたりしていたものが見られた。それらを指していると考えられるが，リズム自体は表現する対象ではなく，対象としたものは楽曲であるので，「自然や動物などを表した楽曲を」というように修正する。

年中：年長の項目38の事例から，年中に「合いの手のような旋律を感じる」を入れてはどうか。

今回，年中からは「合いの手」にうまく気づけなかった事例があがっているが，「合いの手」を遊べる曲は多いこともあってか，考察ではこのような提案が出ている。ただ，この項目が含まれる小分類「メロディー」は年少で項目数が多いので，今回は，現在の項目34「応答的な旋律を歌う」に

含めることとしたい。

年中：小分類「リズム」の項目に「楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを試して遊ぶ」と取り入れても良いかもしれない。

「いきいきDAY」の発表に向けて，事例以外でも明らかに見られていたので，改訂に取り入れる。

年中：年長の項目45について，伴奏の効果を知識として知るところまでは至らないが，その特徴を感じることはできたので，「伴奏の効果を感じる」とするのはどうか。

年長の項目ではあるが，2019年度は年中から伴奏を変えてみた事例があがった。しかし，年長で項目45 について出た事例は，カノン系の活動で輪唱・奏したものであり，必ずしも「伴奏の効果」としての事例ではない。また，この項目が含まれる小分類「テクスチャー」は，カノン，オスティナート系の内容を年中以降に移動させることを考えると，伴奏の効果についての段階は，年長が適当であるかと考える。現行の「伴奏の効果を知る」と書くと「知識として知る」と考えてしまう可能性があることもわかったので，「伴奏の効果に気づく」に変えて，年長の項目とする。

年中：あまり取り組んでこなかった項目について具体的な遊びや曲を組み込むと経験に偏りがなくなると思われる。

本カリキュラム案は，現在の椙山幼稚園の年間指導計画（音楽・リズム）が遊び名や曲名だけになっていることを問題して作成されている。たしかに項目に該当する教材を示すと便利ではあるが，教材が示されることにより，その教材を歌うことが主なねらいになり，その時期に何がねらいなのかは見えにくくなる。したがって，カリキュラムとしては現在の項目的な内容を記載し，学年間で教材の選択や効果については話し合っていくという形をとりたい。

年長：年中の項目30に該当する事例30–1は，教師の働きかけから始まった表現遊びである。年中の項目ではあるが，今まで行っていないので，年長児も楽しむことができた。年長の項目39につながっていくのであれば，年長にも「身体運動」を使って音高をとらえたり表したりするスモールステップ的な項目があると良いのではないか。（年長から）

年長の事例30–1では，子どもたちが活動を新鮮にとらえていた様子がわかる。したがって，項目30を年長まで延長するように修正する。

年長：小分類「音楽の表現対象」にイメージを歌や動きで表現して楽しむことが含まれるのであるとすれば，感情を揺り動かす，イメージを膨らませるような項目があると良い。

小分類「音楽の表現対象」の項目の文章に「イメージ」を入れる。

年長：その他「認め合い，刺激を受けて自分の活動に取り入れる」などの項目や小分類があると良いのではないか。

年長：音楽活動や遊びを通して，周りの友達や教師と様々な気持ちや活動を共有し，認め合えるような分類項目があると良いと考える。音楽表現だけで完結してしまうのではなく，他分野とのつながりを大切にしていくと，子どもたちならではの楽しい遊びや活動につながるので，十分にできるような時間や空間の確保も同時に大切にしていけると良い。

大分類「音楽の機能」に「音楽活動や遊びを通して，集団の中で気持ちや活動を共有し，認め合う」として取り入れる。

以上からカリキュラムを，次の表2のように修正した（修正した部分は太字で示した）。

表２　改訂音楽表現カリキュラム

	小分類	年少	年中	年長
大分類1 素材や表現の仕方	音	・身のまわりの音に気づく。 ・音色，声色の違いに気づく。 ・音の強弱を身体運動でとらえる。 ・音を色や形でとらえる（＝リズム，メロディー）。	・身のまわりの音を聴きわける。 ・長い音，短い音に気づく。 ・音色を聴きわける。 ・楽器の鳴らし方を工夫する。 ・音の強弱をつくる。 ・音を色や形で表す（＝リズム，メロディー）。	・音の立ち上がり，減衰に気づく。 ・イメージにあった音色，声色，強弱を選ぶ。 ・音の強弱の効果を知る。 ・複数の音をグループで色や形に表し，再現する（＝リズム，メロディー）。
	リズム	・拍に合わせて歩く，手をたたく，動く。 ・拍に合わせて，簡単なリズムを打つ。 ・拍の長さ**や拍数の変化**を体感し，身体運動を通して速度やイメージの違い**に気づく**。 ・サイレントシンギングをする（＝音，メロディー）。	・拍に合わせて簡単なリズムを表す。 ・簡単なリズムの応答をする。 ・イメージと速度について気づく。 ・サイレントシンギングをする（＝音，メロディー）。 **・楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを試して遊ぶ。**	・拍に合わせて簡単なリズムを作って表す。 ・簡単なリズムの応答をする。 ・楽曲に合わせて，ふさわしい動き，楽器の選択，楽器の組み合わせを考える。
	メロディー	・身体運動や声を通して音の高低に気づく。 ・音の上行，下降，跳躍等に気づく。 ・言葉に**抑揚をつけて遊ぶ**。 ・応答的な**ことばのやり取りを楽しむ**。	・身体運動や声を通して音の高低**に気づく**。 ・音の上行，下降，跳躍等を身体運動や声で表す。 ・同じメロディー，違うメロディーに気づく ・旋律的な言葉の応答をする。 ・応答的な旋律を歌う。	**・身体運動や声を通して音の高低を表す。** ・楽曲のフレーズと息継ぎに気づく。 ・応答的な旋律を歌う。 ・三部形式を身体運動で表す。 ・合いの手のような旋律に気づく。 ・階名模唱で音高をとらえる。
	ハーモニー	―	―	**・和音の響きを感じる。**
	テクスチャー	―	・オスティナート系の手遊びをする。 **・ずれを楽しむ。**	**・簡単な直行カノンの歌を歌う。** ・伴奏の効果**に気づく**。
	調性	―	・長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ。	・長調から短調へのアレンジなどを感じて遊ぶ。
大分類2 音楽の機能		・音楽やリズムによって，身体の運動が誘発されたり，感覚が刺激されたりする。 ・音楽やリズムに共鳴し，情動が誘発される。 ・音楽やリズムにより音楽的時間を共有する一体感を持つ。 ・手遊びや歌等により，数概念の形成，言葉の認識の深化，季節や行事の訪れの理解等が促進される。 ・音楽やリズムがこどもたちの遊びとして存在する。 **・音楽活動や遊びを通して，集団の中で気持ちや活動を共有し，認め合う**		
大分類3 音楽の表現対象		・自然や動物などを**表した楽曲**をその音楽的特徴から**イメージをとらえ**，楽しむ。 ・ストーリー性のある歌詞を，その音楽的特徴とともに楽しむ。	・自然や動物などを**表した楽曲のイメージをとらえ、**その音楽的特徴を生かして歌う。 ・ストーリー性のある歌詞を、その音楽的特徴を生かして歌う。	・自然や動物などを**表した楽曲のイメージをとらえ、**その音楽的特徴を生かして歌う。 ・ストーリー性のある歌詞を、その音楽的特徴を生かして歌う。 ・登場人物の感情に合わせて、表現する。

おわりに

1年間を通した検討の結果，「素材や表現の仕方」を中心としたカリキュラム試案には，子どもの新たな表現活動を生み出す，幅を広げる，子どもの様子を見たり環境構成したりする際の視点となる等の成果が見られた。一方，項目に立てている要素の正確な理解や学年ごとの段階の共有理解が難しい，「音楽の機能」や「音楽の表現対象」との関連がとらえにくい，これまでの年間指導計画との関係をつかみにくいなどの課題も見られる。

そのことから，2020年度の園内研修では，2019年度の検討を踏まえ，各学年で年間指導計画を立て，実践内容や教材の適切性を再検討している。また，教員間の共有理解および子どもの音楽表現活動への刺激という観点から，執筆者の一人である太田央子を中心として本園で音楽会を開き，カノン，オスティナート，合いの手，和音の響き等の面白さが感じられ，自分たちでもやってみたくなるような演奏発表を行った。これらの検討については，次回の課題としたい。

付　　記

本研究は，JSPS 科研費 JP16K04698の助成を受けたものである。

また，本研究に伴う教員の研修は，令和元年度椙山女学園大学学園研究費助成金〈B〉「幼児期の音楽表現活動に対する教師の音楽観に関する研究」による。

本研究は，山中，太田と，2020年度の「表現」担当の教員でまとめたが，事例研究や学年の考察は，椙山女学園大学付属幼稚園の全教員により行った。

■註

1）山中文，飯田恵，三田郁穂，今井直子，伊藤環，太田央子（2019）：幼児期の音楽表現カリキュラムの研究　その1，椙山女学園大学教育学部紀要12，113−126

2）木製のカエルの楽器であり，背中にギロのような彫りがあり，木製のバチで彫りをなぞるようになっている。

3）例に挙げた『もこ　もこもこ』以外にも，たとえば，『がちゃがちゃどんどん』（元永定正作，福音館書店），『もけらもけら』（山下洋輔著，元永定正イラスト，福音館書店）などがある。

4）『もこ　もこもこ』（谷川俊太郎著，元永定正イラスト，文研出版，1977）を参照されたい。

5）「拍手で宝探し」とは，次のような遊びである。

①クラスの子どもたちの中から鬼を一人決め，「宝」（と決めたもの）をクラスに隠す。

②鬼は，子どもたちが鳴らす拍手等で「宝」を探す。子どもたちは，鬼が「宝」に近づいたら大きく拍手，遠のいたら拍手を小さくして，鬼を誘導する。

＊本文中の楽曲の作詞・作曲者等は以下である。

「アイアイ」：相田裕美作詞，宇野誠一郎作曲

「あおむし」：手遊び歌　作詞作曲不詳 ＝「キャベツのなかから」

「赤鼻のトナカイ」：Marks John D 作詞作曲，日本語歌詞　新田宣夫

「あさがおこりゃこりゃ」：阿部直美作詞作曲
「あたまかたひざポン」：イギリス民謡，作詞・作曲・訳詞者不詳
「あめふりくまのこ」：鶴見正夫作詞・湯山昭作曲
「あぶくたった」：わらべ歌・吉川和夫編曲
「アルプス一万尺」：作者・訳詞者不詳
「アンパンマンたいそう」やなせたかし / 魚住勉作詞，馬飼野康二作曲
「一本橋こちょこちょ」：手遊び歌
「一羽のカラス」：数え歌
「一本でもニンジン」：前田利博作詞，佐瀬寿一作曲
「エビカニクス」：増田裕子作詞・作曲
「エビカニクス～ハイパーバージョン」：増田裕子作詞・作曲，塚山エリコ編曲
「大きな歌」：中島光一作詞・作曲
「大きな栗の木の下で」：外国曲，平多正於 / 阪田寛夫歌詞
「大きな古時計」：保富康午作詞，Henry Clay Work 作曲
「オクラホマミキサー」：アメリカ民謡
「お正月」：東くめ作詞，滝廉太郎作曲
「おなかのへるうた」：阪田寛夫作詞，大中恩作曲
「おにのパンツ」：「フニクリフニクラ」（Luigi Denza 作曲）の替え歌，作詩者不詳
「おはながわらった」保富康午作詞，湯山昭作曲
「おはなしゆびさん」：香山美子作詞，湯山昭作曲
「音楽隊がやってくる」：吉岡修作詞，小林亜星作曲
「かえるの合唱」：岡本敏明作詞，ドイツ民謡
「かたつむり」：文部省唱歌
「ことばあそびうた」：谷川俊太郎詩
「カレンダーマーチ」：井出隆夫作詞，福田和禾子作曲
「汽車は走る」：岡本敏明作詞・作曲
「きのこ」：まど・みちお作詞，くらかけ昭二作曲
「キャベツはキャッキャッキャ」：作詞作曲不詳
「キューピーさん」：葛原しげる作詞，弘田龍太郎作曲
「草競馬」：Forster 作曲
「子犬のマーチ」：久野静夫作詞・外国曲
「こいのぼり」：近藤宮子作詞，童謡
「こぶたさんのおうち」：外国曲
「コンコンクシャン」：香山美子作詞，湯山昭作曲
「ごんべさんのあかちゃん」：「リパブリック賛歌」（アメリカ民謡）の替え歌
「ジェンカ」：「レトカ　イエンッカ」（フィンランドダンス音楽，Jaakko Salo 作曲）
「シャボン玉」：野口雨情作詞，中山晋平作曲
「世界中の子どもたちが」：新沢としひこ作詞，中川ひろたか作曲
「そうだったらいいのにな」：井出隆夫作詞，福田和禾子作曲
「だいすきだい」：阿部直美作詞・作曲
「大切なたからもの」：新沢としひこ作詞・作曲
「たけのこ体操」：中沢善宏作詞，越部信義作曲
「だしてひっこめて」：外国曲，作詞不詳
「たなばたさま」：林柳波作詞・権藤はなよ補作詞，下総皖一作曲
「たまごはエッグ」：ひろみち＆たにぞう
「だんご虫のうた」：山口廣子作詞・作曲，板倉志伸編曲
「ちゃつぼ」：わらべうた

「ちょうちょ」：野村秋足作詞，スペイン民謡
「ちょきちょきダンス」：佐倉智子作詞，おざわたつゆき作曲
「動物の謝肉祭」：サン＝サーンス作曲，組曲『動物の謝肉祭』
「どうぶつえんへいこう」：海野洋司作詞，T.Paxton 作曲
「ドコドコノキノコ」：もりちよこ作詞，ザッハトルテ作曲
「どんぐりころころ」：青木存義作詞，梁田貞作曲
「とんぼのめがね」：額賀誠志作詞・平井康三郎作曲
「ながぐつマーチ」：上坪マヤ作詞，峯陽作曲
「ニコニコ列車」：二本松はじめ作詞・作曲
「人間ていいな」：山口あかり作詞，小林亜星作曲
「のぼるよコアラ」：多志賀明作詞・作曲
「バスごっこ」：香山美子作詞，湯山昭作曲
「バスにのって」：谷口國博作詞・作曲
「はないちもんめ」：わらべうた
「パプリカ」：米津玄師作詞・作曲
「うれしいひなまつり」：サトウハチロー作詞，川村光陽作曲
「ふるさと」：高野辰之作詞，岡野貞一作曲
「べんけいが」：わらべうた
「ボレロ」：モーリス・ラベル作曲
「マイムマイム」：イスラエル民謡
「まつぼっくり」：広田孝夫作詞，小林つや江作曲
「まめまき」：えほん唱歌
「みんな大きくなった」：藤本ともひこ作詞，中川ひろたか作曲
「虫のこえ」：文部省唱歌
「めだかの学校」：茶木滋作詞，中田喜直作曲
「もみじ」：高野辰之作詞，岡野貞一作曲
「もりのくまさん」：馬場祥一作詞，アメリカ民謡
「ヤッター！サンタがやってくる」：中川ひろたか作詞・作曲
「やんちゃ怪獣どっかーん」：佐藤弘道・谷口國博作詞，谷口國博
「やまごやいっけん」：志摩桂訳詞，アメリカ民謡
「ゆうびんやさん」：なわとびうた
「ゆき」：文部省唱歌，小林秀雄編曲
「やれひけそれひけ」：『ピカリンベストつながりあそび・うた 3 』（二本松はじめ作，音楽センター）
　より　絵本『11 ぴきのねこふくろのなか』（馬場のぼる著）の劇中歌
「ロンドンばし」：高田三九三訳詞，イギリス民謡
‘We Will Rock You’：Brian May 作詞・作曲